

教育研究業績書

2021年02月04日

所属：教育学科

資格：教授

氏名：田中 每実

研究分野	研究内容のキーワード
教育学、教育哲学、大学教育学	臨床、人間形成論、ライフサイクル、相互性
学位	最終学歴
京都大学博士（教育学）、文学修士、文学士	大阪大学大学院文学研究科博士課程（教育哲学・教育史専攻）単位取得退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 「教育の本質と目的」第1回～第5回	2013年1月14日作成	厚生労働省：看護師等養成所専任教員養成講習会実施におけるe-ラーニング導入科目のコンテンツ作成委員会
2. 「生成する大学教育学」	2012年3月	京都大学高等教育研究開発推進センター編 ナカニシヤ出版 分担執筆「大学教育学とは何か」
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 京都大学名誉教授	2012年4月1日	番号 64130447号

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 啓蒙と教育－臨床的人間形成論から	単	2021年2月	勁草書房	全470頁 啓蒙とその野蛮化に向き合う理論構築過程を、京都学派教育学の展開（第2章「死者との実存協同－田邊元」、第3章「生命鼓橋の世代間作り渡し－森昭」、第4章「世代継承的公共性の生成－大学教育に焦点づけて」）に見出した。この京都学派教育学の啓蒙の野蛮化への向き合い方をより広範な歴史過程に位置付けるために、「序論」では第一次大戦以後のカッシーラー、フロイト、ウェーバー、アーレントの仕事と対比し、第1章では「遠野、花巻、盛岡1910年」の時空間における石川啄木、佐々木喜善、柳田国男、高村光太郎、宮沢賢治の仕事と対比した。最後に終章では、これらの包括的な考察を受けて、「啓蒙の野蛮化に抗して世代継承的公共性と紡ぐ」ことについて論じた。
2. 続日本教育学の系譜－京都学派とマルクス主義	共	2020年8月	勁草書房	小笠原道雄、森田尚人、森田伸子、田中每実、矢野智司 著（第3章「死者との実存協同と世代継承的公共性－田邊哲学を臨床的人間形成論として読む」157－200頁）西田幾多郎とともに京都学派を率いた田邊の哲学を概観し、これを、師弟関係にある田邊の「死者との実存協同」から森昭の「生命鼓橋の意世代間作り渡し」へ、さらに田中每実の「世代継承的公共性」へいたる臨床的人間形成論の展開過程に位置付けた。
3. 新編『森昭著作集』全8巻	共	2015年9月	学術出版会	戦後教育学を代表する教育学者森昭の旧著作集を再編集し、解題を著した。黎明書房から発行された旧著作集に、第2巻『教育とは何か』／『ドイツ教育の示唆するもの』、第7巻『現代教育思潮』その他、を、さらに第6巻に「田邊先生からの書簡から」を加えて、森の理論展開を把握しやすくした。旧著作集刊行以後の関連

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
4.『日本教育学の系譜』	共	2014年8月	勁草書房	研究の蓄積を踏まえて、包括的な「解題」を著した。小笠原道雄、田中毎実、森田尚人、矢野智司著／全408頁、うち「第四章森昭を読む－教育的公共性から世代継承的公共性へ」（293-404頁）、「あとがき」（405-8頁）を担当した。本書では、戦前・戦後期の代表的な四人の教育学者の学問的営為を追求しつつ、「日本教育学説史」の構想を教育哲学的アプローチによって実現しようとした。うち戦後期を代表する教育学者である森昭の膨大な全著作を網羅的に検討し、そこに臨床的人間形成論への理論的足がかりを見いだした。
5.『教育する大学－何が求められているのか』	共	2013年11月	岩波書店	第1章「なぜ「教育」が「問題」として浮上してきたのか」（全182頁、うち 21-47頁） ・大学教育が問題として浮上してきた歴史的経過について論じ、この「問題」としての捉え方の妥当性について論じた。
6.『未来の大学教員を育てる－京大文学部・プレFDの挑戦』	共	2013年3月	勁草書房	田口真奈 出口康夫編（全260頁、うち99-118頁）第3章「京都大学のプレFD活動－相互研修型FDをめぐる葛藤史に焦点づけて」・京都大学文学部プレFDプロジェクトの生成史について、概括的に論じた。
7.『教育思想史で読む現代教育』	共	2013年3月	勁草書房	森田尚人・伸子編 第14章「臨床－教育理論における臨床性志向の意義と課題」（全401頁、うち288-306頁）・教育理論における臨床性志向の歴史と現状について、包括的に検討した。
8.『教育人間学－臨床と超越』	共	2012年8月	東京大学出版会	田中毎実編（全256頁、うち i-v 頁、1-24頁）「はじめに」「序章 人間学と臨床性：教育人間学から臨床的人間形成論へ」 ・日本における教育人間学の現状と課題について、第一線の執筆者を集めて、まとめた。編者として、「はじめに」と「序章」を執筆した。
9.『臨床的人間形成論の構築－臨床的人間形成論 第2部』	単	2012年4月	東信堂	全274頁 ・博士学位論文の後半を、その後の業績を補充して刊行した。臨床的人間形成論を京都学派、京都学派教育学、森昭教育人間学、人間形成原論、人間形成論といった系譜に位置づけ、これらを順次体系的に検討して、臨床的人間形成論の学問論的構成を示し、今後の展開について論じた。
10.『生成する大学教育学』	共	2012年03月	ナカニシヤ出版	京都大学高等教育開発推進センター編（全343頁、うち1-24頁）・第1章「大学教育学とは何か」。この新たな分科の全体の構成について基本的な方向付けを行った。つまり、大学教育学の歴史的社会的由来、学問論的特質、現状、課題について、順次論じた。
11. Education and the Kyoto School of Philosophy	共	2012年	Springer	Paul Standish, Naoko Saito Editors, Chapter5: A Genealogy of the Clinical Theory of Human Becoming. (全235頁、うち55-76頁) ・イギリスの研究者と我が国の研究者が合同して、京都学派の教育理論についてまとめた共同研究である。私は、臨床的人間形成論を生み出した京都学派教育学の在り方について論じた。
12.『幸福感を紡ぐ人間関係と教育』	共	2011年11月	ナカニシヤ出版	子安増生、杉本均編（全244頁、うち65-74頁）第3章「非対称的相互性から対称的相互性へ」 ・不幸を紡ぐ教育関係から脱却する方途を考えるために、非対称的相互性と対称的相互性との関連について考察を加えた。
13.『大学教育の臨床的研究－臨床的人間形成論 第1部』	単	2011年11月	東信堂	全260頁 ・博士学位論文の前半部を、その後の業績を補充して刊行した。大学教育の臨床的研究の現状と課題を述べ、公開実験授業、遠隔教育、相互研修型FD組織化などの臨床的研究を概観し、これらの研究の成果と課題について論じ、以上の研究の臨床的人間形成論構築にとっての意義について論じた。
14. Building networks in higher education : Towards the future of faculty development	共	2011年10月	Maruzen Planet Co., Ltd., Tokyo	京都大学高等教育研究開発推進センター編（全220頁、うち2-24頁および207-210頁）Chapter 1: The Status of Faculty Development in Japan: Addressing. / Afterword. ・京大センターとThe Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching との合同国際シンポジウムの冒頭で、方向付けを与えた。Afterword を執筆した。
15.『大学の学び－教育内容と方法』〈リーディングス日本の高等教育2〉	共	2011年2月	玉川大学出版部	「大学の学校化－大学教育改革の行方と教育理論」：以前刊行した同名の論文（『教育学年報9：大学改革』、世織書房2002.9所収）がリーディングスに採択されたものである。
2 学位論文				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
1. 臨床的人間形成論の構築—大学教育の実践的認識を手がかりにして—	単	2002年	京都大学で受理	前半の大学教育の実践的研究と後半の臨床的人間形成論の学問論からなる。これを『大学教育の臨床的研究』と『臨床的人間形成論の構築』の二部に分けて、東信堂から刊行した。
3 学術論文				
1. 基調報告	単	2020年3月	武庫川女子大学学校教育センター『学校教育センター紀要』	123-130頁；「武庫川女子大学教育学部・学校教育センター研究部門設置記念シンポジウム：女子大学の教師教育を創る」（2019年5月25日開催）の「基調報告」として、「女子大学教師教育の近未来と課題」、「教師教育の構造とジェネラティビティの概念」、「女子大学の教師教育はどうあるべきか」について順次論じて、以後のシンポジストたちの議論の口火を切った。
2. 大学教育としての教員養成	単	2017年3月	武庫川女子大学学校教育センター年報 第2号	33-44頁；前稿「教員養成の人間学的・歴史的基盤とその制度化—人間形成論的考察」（1993年）での考察に、教員養成を<2000年前後から急速に変容した大学をフィールドとする組織的営み>として把握する観点を、新たに付け加えた。今日では、大学における教員養成は、関連する組織を相互性のネットワークへと再編成し、自立し連携する教職員集団を生成することによって、再生する。
3. 生成する公共性と教育的公共性	単	2015年12月30日	日本教育学会『教育学研究』第82巻第4号	520-530頁；「特集 教育の公共性」への投稿依頼に応じた。「公共性」を教育理論の立場から「生成する公共性」として把握し直した。この生成の連関に、「教育的公共性」、「世代継承的公共性」などをそれぞれに位置づけ、それぞれのあり方と課題について論じた。
4. 啓蒙と自己組織化の間—指定討論にかえて	単	2015年11月30日	大学教育学会『大学教育学会誌』第37巻第2号	110-113頁；2014年度課題研究集会シンポジウム2「FDの実践的課題解決のための重層的アプローチ」における指定討論である。佐藤浩章、山田剛史による課題研究成果発表に対して、寺崎昌男、絹川正吉とともに、コメントを加えた。私のコメントは、おもにFD従事者の現状と課題に焦点づけて論じた。
5. 課題研究に関する総括的報告	共	2015年5月10日	教育哲学会『教育哲学研究』第111号	小玉重夫と共著（個人分担分/49-52頁）；第57回大会での課題研究「思想と現場をつなぐ—教育哲学のフロンティア（1）」の司会者の一人として、課題研究における議論をまとめ、今後の課題を、現場と思想が連携する教育的公共性、世代継承的公共性の構築であると、論じた。
6. 教育人間学の政治性について	単	2014年10月	教育思想史学会『近代教育フォーラム』23号	67-75頁／<フォーラムⅡ>関根宏朗「政治的教育人間学の成立可能性を考える」へのコメント論文である。関根が主題化したフロム／マルクーゼ、田邊元／森昭の理論における政治性について論じた。
7. 司会論文「シンポジウムは「大学の危機」を問うことができたか」	単	2013年11月	教育思想史学会「近代教育フォーラム」第22号	(169-176頁) 教育思想史学会大会におけるシンポジウム「大学の危機」を思想史が問うの司会者として、シンポジウムの成果を評価した。思想史における臨床性の欠如という欠陥が示されたシンポジウムであった。
8. 長田に感じる違和感	単	2013年5月	教育哲学会『教育哲学研究』第107号	211-2頁／「戦後教育学の再検討Ⅳ」における小笠原道雄による長田新に関する論考へのコメントである。
9. 基調講演「相互研修型FDの総括—これまでとこれから—」	単	2012年11月	京都大学高等教育研究開発推進センター紀要「高等教育研究」第18号	第18回大学教育研究フォーラムの基調講演であり、この講演を受けて、山田剛史(愛媛大学)、高橋哲也(大阪府立大学)、夏目達也(名古屋大学)、飯吉透(京都大学)、樋口聡(文部科学省)などによるシンポジウムがなされた。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2013年現在に至る	日本学術振興会・特別研究員等審査会委員
2. 2008年現在に至る	日本学術会議第20期～21期連携会員（心理学、教育学）
3. 2008年現在に至る	教育哲学会理事
4. 2003年現在に至る	大学教育学会常任理事